

体言化理論から見るアルメニア語の名詞修飾表現

クロヤン ルイザ

luizakloyan@yahoo.co.jp

キーワード：アルメニア語 体言化理論 名詞修飾表現 結果分詞 未来分詞
主体分詞 不定詞 体言基盤体言化 用言基盤体言化

要旨

本稿では、アルメニア語の名詞修飾表現を Shibatani (2017, 2018, 2019) が提案した「体言化理論」の観点から再分析を試みる。そして、アルメニア語の分詞による名詞修飾表現と不定詞による名詞修飾表現は、それぞれ「項体言化構造 (argument nominalization)」と「事態体言化構造 (event nominalization)」に当てはまることを示す。体言基盤の体言化構造の場合は、属格接辞が体言化辞として機能し、用言基盤の場合には、分詞の形態素が体言化辞として機能することを示す。不定詞が用言基盤であるが、通常の体言と同様に体言化辞を伴って名詞修飾の機能を果たしているということは、不定詞が分詞より名詞性が高いということに由来する現象であると主張する。また、従来、定冠詞や人称決定辞は他の品詞類を体言化するものとされてきたのに対して、定冠詞は（すでに）体言化されているものを、「それは体言（準体言）であり、そしてそれは指示機能を果たしており、その指示物は聞き手にとって同定できるものである」という情報を伝達する機能を果たしており、人称・所有接辞は分詞の事態参与者や対象物や結果を示す機能を果たしているという観点から再分析を試みる。

1. はじめに

従来の生成文法や言語類型論などにおいて名詞修飾表現について頻繁に議論されてきたが、通言語的に異なった構文を形成する名詞修飾表現を統一的な観点から観察できる理論は存在していなかった。しかし、近年 Shibatani (2017, 2018, 2019) によって提案された体言化理論では、従来のあらゆる構文を統一的な観点から扱うことが可能になった。具体例として、言語類型論の観点から注目を集めてきた Keenan and Comrie (1979)、Comrie (1996, 2002, 2008) などについて見てみよう。Comrie (1996, 2002, 2008) は世界の諸言語の名詞修飾表現についていくつかの興味深い一般化を示している。中で、Comrie (1996, 2002) は、世界諸言語の「関係節」をヨーロッパ型とアジア型とに分類しており、前者は主要部名詞と修飾節の関係が統語的に規定されるタイプであり、後者は両者の関係が語用論的要因によって規定されるタイプであると指摘している。英語は前者の典型例であり、日本語は後者の典型例とされている。Comrie (2008) は、さらに、世界の諸言語の関係節化ストラテジーと言語の基本語順が互いに強い関わりを持っていると指摘し、次のような一般化も示している。修飾節前置型関係節 (prenominal RCs) を持つ言語は OV 型の語順を基本としており、修飾節後置型関係節 (postnominal RCs) を持つ言語は VO

型の語順を基本としている。VO型の語順を基本とする言語には修飾節前置型関係節は殆ど存在しないと指摘している。

これらの一般化は日本語と英語を中心に考えるときれいに整理されるが、アルメニア語の名詞修飾表現を考えた場合、どちらか一方への分類が困難である。なぜなら、アルメニア語はOV型の語順を基準としているが、名詞修飾表現については、英語などの定形の関係節、補文節に該当する構文の他に、分詞形動詞が（非定形）名詞修飾表現を形成する構文のいずれも存在している。この中、一方の型が主流で、もう一方が周辺的というわけではなく、両方の型が平行的に存在しているからである。

では、アルメニア語の非定形動詞による名詞修飾表現について、どのように考えて良いのであろうか。従来、分詞形動詞が名詞修飾の機能を持つ場合は、形容詞同等のものであると議論されてきたが、この考え方に大きな問題がある。なぜなら、形容詞や動詞を明確に区別できる通言語的な基準も存在しないからである。また、分詞形動詞のように名詞修飾の機能を有する不定詞は、意味・用法の面において形容詞と明らかに異なっているが、こういった構文の文法的な位置付けに関する問題も、従来の伝統文法において無視されてきた。例えば、(1a, b)のように、不定詞の属格形を伴う非定形名詞修飾表現を定形の名詞修飾表現と置き換えることが不可能な場合に関して、形式の面において、従来の「節」や「従属文」という考え方では説明不可能である。なぜなら、アルメニア語の伝統文法においても、定形の動詞を伴わない限り、ある表現が「文」や「節」であると認めることができないためである。

- (1) a. Glxac'avn anc'n-el-u del berec'.
- headache.DEF pass-INF-GEN medicine bring.AOR.3SG
- 「頭痛が治る薬を持ってきた。」
- b. *Del or glxac'avn anc'ni berec'.
- medicine that headache.DEF pass.SUB.3SG bring.AOR.3SG
- 「頭痛が治る薬を持ってきた。」

柴谷 (2021: 462-463) は、「名詞修飾要素は文として成立しえない構造である」と主張している。そして、このような名詞修飾要素は体言化の文法プロセスを経た上で、名詞を修飾する機能を果たせるようになっていると説明している。そこで、本研究は、体言化理論の観点を採用し、アルメニア語の名詞修飾表現の本質を包括的に捉えることを試みる。

結論から述べると、分詞による名詞修飾表現と不定詞による名詞修飾表現は、それぞれ用言基盤の「項体言化」と「事態体言化」構造の修飾用法として認めることができる。

また、従来の属格・所有表現が体言基盤体言化構造に当てはまる。体言基盤の体言化構造の場合は、属格接辞が体言化辞として機能し、用言基盤（動词语根）の場合には分詞の形態素が体言化辞として機能する。このことから、不定詞が通常の体言と同様に体言化辞（いわゆる属格接尾辞）を伴って名詞修飾の機能を果たしているということは、不定詞は用言基盤でありな

がら、分詞より高い名詞性を有するという性質によると考えられる。

本論文の構成は次のとおりである。第2節では、アルメニア語について紹介する。第3節では、「体言化」理論について概観する。第4節では、アルメニア語の先行研究における体言化の概要と本研究の立場を述べる。第5節では、体言基盤体言化構造・所有表現の体言化について考察する。第6節では、用言基盤体言化構造について考察し、分詞形動詞や不定詞による名詞修飾構文は、体言基盤体言化をモデルに発達した用言基盤体言化であると主張する。そして、第7節では、結論を述べる。

2. アルメニア語について

アルメニア語 (Armenian、アルメニア語名 *hayeren*) はインド・ヨーロッパ語族において単独で独立した語派を形成する言語である。

アルメニア語は、およそ 5000 年前にまでさかのぼる古い歴史を持ち、現在は話されていない死語 (ヒッタイト語、古代ギリシャ語、ラテン語、サンスクリット語、古代アヴェスター語、フリュギア語など) との近縁性もあり、いくつかの現代語 (ロシア語、英語、ドイツ語、イタリア語、フランス語、スペイン語など) との近縁性もある。

五世紀初頭にメスロプ・マシュトツ (*Mesrop Maštoc*, c.362-440) によってアルメニア語の文字が創作され、当時の標準語は古典アルメニア語 (*Classical Armenian, grabar*) であり、古典アルメニア語は現在でも聖書や教会の中で使用し続けられている。19 世紀に話し言葉を基とした現代語が公用語として認められることになった。ただし、時代の移り変わりと共に、東アルメニア語と西アルメニア語という二つの文語が独立して存在するようになり、今日では、アルメニア共和国の公用語が東アルメニア語であり、西アルメニア語は世界各地に住んでいるアルメニア人の文語となっている。

本研究は、アルメニア共和国の公用語であり、筆者の母語である現代東アルメニア語を分析対象とする。本論文で「アルメニア語」というのは、現代東アルメニア語を指し、次節の文法特徴の記述は現代東アルメニア語 (以下「アルメニア語」) について概観する。

2.1. アルメニア語の文法的特徴

現代アルメニア語は、基本的に SOV 型の語順を持ち、語順はかなり自由であるが、焦点となる要素や疑問詞が動詞の直前に来る傾向がある。

- (2) a. *Aramə xnjorə kerel ē.* 【SOV】
 Aram.DEF apple.DEF eat.PTCP.PRF is
- b. *Kerel ē xnjorə Aramə.* 【VOS】
 eat.PTCP.PRF is apple.DEF Aram.DEF
 「アラムがりんごを食べた。」

- c. Ov ē kerel xnjorə.
 who is eat.PTCP.PRF apple. DEF
 「誰がりんごを食べたか。」

現代アルメニア語にはインド・ヨーロッパ語族の言語の特徴の他に、グルジア語（ジョージア語）などの近隣のコーカサス諸語の影響も見られる。例えば、名詞や代名詞における文法的性の欠如、破裂音と破擦音に見られる三つの対立（有声、無声無気、無声有気）、名詞句の左枝分かれなどがその影響だと考えられている (Dum-Tragut 2009)。また、形態構成の多くは膠着的だと言える。

2.1.1. アルメニア語の名詞

アルメニア語の名詞特有の文法カテゴリーは格（変化）、数（変化）（接尾辞 *-(n)er*）、定性・不定性、有生・無生の区別である。

格変化は原則として格語尾、場合によって語幹の交換によって表される。現代東アルメニア語には6つの格が認められる。属格と与格は同じ形になるが、属格は定冠詞が付かない点で与格と相違点を見せる。

アルメニア語の名詞の複数形は単音節語に接尾辞 *-er* (*ji* 「一つの馬」 → *jjier* 「複数の馬」)、複音節語に *-ner* (*namak* 「一枚の紙」 → *namakner* 「数枚の手紙」) を付けることによって形成される (Dum-Tragut 2009)。格語尾は、複数接辞の後に付き、その曲用型（形態）は一定である。

定性・不定性に関して、アルメニア語では「定」を表すには *-ə/-n* という定冠詞を用いる (*mard* 「人」 *-mardə* 「人 (定)」) が、「不定」の場合は無標である (3 a, b)。名詞を決定するカテゴリーとして、定冠詞の他に (3') のような決定辞を用いる場合もある。

- (3) a. Ayd orə mi mard tesa.
 that day.DEF one human see.AOR.1SG
 「その日は一人の人間を見た。」
 b. Ayd orə ayd mardu-*n* tesa.
 that day.DEF that human-DEF see.AOR.1SG
 「その日はその人を見た。」

- (3') a. 所有接尾辞 (possessive suffixes) *-s* (1人称), *-d* (2人称), *-ə/-n* (3人称)
 b. 人称接尾辞 (personal suffixes) *-s* (1人称), *-d* (2人称), *-ə/-n* (3人称)

これらの決定辞のうち、3人称の接尾辞 *-ə* は形態的に定冠詞と同様であるため、場合によっては人称接尾辞と定冠詞の区別が困難である。

2.1.2. アルメニア語の形容詞

アルメニア語では、主名詞の属性を表す語を形容詞扱いとする。形容詞と名詞の主な相違点として、形容詞は名詞修飾機能において属格語尾を伴わないという点である。ただし、従来の生成文法や言語類型論において形容詞という品詞について議論されてきた特徴 (Croft 1991, Baker 2003, Dixon 1977, 2004) について、アルメニア語の形容詞はより複雑な状況を見せる。具体的には、アルメニア語の形容詞は大きく (a) 「質的形容詞」(qualitative adjectives) (物の外的／内的な特徴、色、人や動物の物理的な特徴、人の道徳的／精神的な特徴) (*erkar* 「長い」, *tak* 「暖かい」)、(b) 「関係形容詞」(adjectives of relation) (他のものに対して有する時空間的な特徴や所有や所属など) (*oske* 「金の」, *gyulakan* 「田舎の」, *mardanman* 「人間らしい」) の2種に分類される (Mirumyan 2012: 160)。これらの形容詞は互いに、意味用法のみならず形態統語的な特徴においても相違する。具体例として、例えば (4) のように、質的形容詞は、形容詞の主な性質として議論されてきた程度性 (Croft 1991) を持つが、関係形容詞は持たないというのが挙げられる (Petrosyan 1987: 12-13, Mirumyan 2012: 169)。このような相違点が他にも数多く存在する (クロヤン 2022)。

- (4) a. 質的形容詞 : *barjr* 「高い」 → *aveli barjr* 「もっと高い」
 b. 関係形容詞 : *antun* 「ホームレス」 → **aveli antun* 「もっとホームレス」

つまり、質的形容詞は形容詞として典型性を見せるが、関係形容詞はそのような性質を有しないということである。

機能の面において形容詞と類似した振る舞いを見せるのは名詞修飾の用法を持つ分詞形動詞である。ただし、本論文で議論するように、体言化理論の観点からそれぞれの構造を分析すると、分詞形動詞と形容詞の間にも一定の相違が観察される。まず、アルメニア語の分詞形動詞について概観する。

2.1.3. アルメニア語の分詞形動詞

アルメニア語には *derbay* 「分詞」(der 部分 bay 「動詞」) と呼ばれる、非定形の動詞形式が複数ある。その中で、接尾辞 *-el* 又は *-al* を伴う形式は英語などの infinitive に相当する (Ačariyan 1965)。その他の形式は、英語などの participle 「分詞」に相当するもので、現代 (東) アルメニア語では、「結果分詞」、「現在分詞」、「未来分詞」、「未来分詞II」、「完了分詞」、「付帯分詞」、「主体分詞」、「否定分詞」が認められる。本論文では英語などの infinitive 「不定詞」に相当するアルメニア語の *derbay* を「不定詞」と呼び、それ以外の *derbay* を「分詞」と呼ぶことにする。

アルメニア語の不定詞は名詞修飾の機能も持つ。また、分詞の中では、結果分詞、主体分詞、未来分詞、未来分詞IIも名詞修飾の機能を有する。それ以外の分詞は、主にコピュラ動詞と共に様々な時制を作る役割を果たしている。次節において、本論文の分析対象とする、名詞修飾の機能を果たす分詞について概観する。

2.1.3.1. 結果分詞（語尾 *-ac*）

結果分詞は動詞の現在語幹（*-e-conjugation verbs* (*k'n-el* 「寝る」 → *k'n-ac* 「寝た」）およびアオリスト語幹¹（*-a-conjugation verbs* (*zayran-al* 「怒る」 → *zayrac'-ac* 「怒った」））に *-ac* という接尾辞を結合させて形成され、主な機能は次のとおりである。(5) a, b は定形節においてコンピュータ動詞と共に動詞の「完了過去形」と「完了現在形」を形成している。(6) 副詞的な機能を果たし、(7) は (III) 非定形節において名詞修飾の機能を果たしている。

- (5) a. *Hogn-ac ēi.*
 tired-PTCP.RES I₁ was
 「私は疲れていた。」
- b. *Hogn-ac em.*
 tired-PTCP.RES I₁ am
 「私は疲れている。」
- (6) *Hakobə zayrac'-ac ē xos-um.*
 Hakob.DEF angry-PTCP.RES is talk-PTCP.PRS
 「ハコブは怒って話している。」
- (7) *k'n-ac tlamard*
 sleap-PTCP.RES man
 「寝ている男性」

2.1.3.2. 主体分詞（語尾 *-of*）

主体分詞は進行中の動作を表しており、前節で概観した完了した動作を表す結果分詞とアスペクトの側面において対立を見せている。主体分詞は結果分詞と同様に動詞の現在語幹およびアオリスト語幹に *-of* という接尾辞を結合させて形成される。主体分詞は原則として動作主名詞（*nomen agentis*）的な分詞とされているが、文法的な態を持つ点や目的語を取るという点で動詞的な振る舞いを見せる。主体分詞の主な機能は、非定形節における名詞修飾の機能である。

- (8) *Sa lav sovor-of erexan ē.*
 this good study-PTCP.SUBJ child.DEF is
 「こちらがよく勉強している子である。」

主体分詞は体言化しやすい性質から、名詞としての語彙化が進んでおり、同一形態で二つの品詞としての意味・用法を表している語も多く見られる。

¹ アルメニア語の単純過去時制を表す形式。目撃者の過去とも言われている。

- (9) (a) *groł* a. 作家 b. 書いている
 (b) *cnoł* a. 親 b. 生んでいる
 (c) *usanoł* a. 学生 b. 勉強している

2.1.3.3. 未来分詞 (語尾 *-elu / -alu*)

未来分詞は、不定詞 *-el / -al* に *-u* という接尾辞を結合させることによって形成され、潜在的な出来事および、発話時以降に行われる出来事の意味を表す。未来分詞は、主に直説法の通常の未来時制の構成要素として使用される。

- (10) *Valə gn-alu em dproc'.*
 tomorrow.DEF go-PTCP.FUT I_am school
 「明日学校に行く。」

未来分詞は、形態上、不定詞の属格の格語尾を伴った形と同形であるため、以下の例における名詞修飾表現は、不定詞の属格形と考えるか、未来分詞と考えるかによって、以下のように二通りの解釈が可能になる (Dum-Tragut (2009: 207))。

- (11) a. *katar-el-u gorc*
 fulfil-INF-GEN work
 “the work to fulfil”
 「(時制を持たない) 果たすべき仕事」
 b. *katar-elu gorc*
 fulfil-PTCP.FU work
 “the work which must be done”
 「未来にしなければならない仕事」

2.1.3.4. 未来分詞 II (語尾 *-ik'*)

未来分詞 II は不定詞形に *-ik'* という接尾辞を結合させることによって、他動詞と受動態動詞からのみ形成される。未来分詞IIは、発話時以降に行われる出来事を表し、主に非定形節における名詞修飾の機能で用いられる。

- (12) *Valə hagnel-ik' šorers orošec'i.*
 tomorrow wear-PTCP.FUT2 cloth.PL.my decide.AOR.1SG
 「明日着る服を決めた。」

なお、2.1.1 節で観察した名詞特有の文法カテゴリーが形容詞や分詞などの品詞類に対しても

適応可能である。このことについて、以下で詳細に考察する。

2.1.3.5. 不定詞 (語尾 *-el / -al*)

アルメニア語の不定詞は動詞の語幹に *-el / -al* を結合して形成される。不定詞は多機能的であるが、本稿では名詞修飾機能の観点から分析対象とする。名詞修飾となった場合は、通常の名詞と同様に属格の接尾辞（以下体言化辞）を伴う。

- (13) *Hac' t'x-el-u buyr-ə taracv-el ěr šurjbor-ə.*
 bread bake-INF-GEN fragrance-DEF spread-INF was around-DEF
 「パンを焼く匂いが辺り一面に広がっていた。」

- (14) *hyuranoc'-um gišer-el-u aravot-ə...*
 hotel-LOC overnight-INF-GEN morning-DEF
 「[[ホテルに泊まった]朝]...

不定詞は、前節で概観した名詞以外の品詞と同様に名詞特有の文法カテゴリーが適応可能である。また、文において主語や (15) のように述語の目的語となる特徴から、名詞性が高いと言われている。ただし、複数化することができないという点で形容詞や分詞との相違点も見せる。

- (15) *Sirum er kard-al.*
 like.PTCP.PRS was read-INF
 「読むことが好きだった。」

本節では、アルメニア語とアルメニア語の文法について概観した。次節において、体言化理論について概観する。

3. Shibatani の体言化理論

本節では、Shibatani (2017, 2018, 2019)、柴谷 (2021) によって提案された体言化理論について確認する。Shibatani (2017: 293-294) は、従来の研究において従属節が「節」や「文」と呼ばれてきたのは、文法構造の外的特徴と内的特徴の区別に十分な注意が払われてこなかったからであったと指摘し、機能主義言語学の観点から従来「関係節」（日本語学では「連体修飾節」）、「補文節」（日本語学では「準体節」、「補足節」）と呼ばれてきたものは、文法的体言化構造 (grammatical nominalizations) であると主張している。つまり、従来の研究では、以下 (16) (17) において用いられている “John is honest” というのは、(16) では「文」、(17) では「文、又は、節」と考えられてきたが、実際には、それぞれ違った機能を果たしている。

- (16) John is honest.

(17) Mary knows [John is honest].

(プラシャント・柴谷 (2020: 421))

(16) では「節というレベルで、主語 John についての叙述 (predication) を行い、文というレベルではその叙述が真であると断定陳述 (assert) している。これに対して、(17) では同構造はジョンが正直であるという事態に関する事実を概念表示していて、名詞 fact, truth などのように抽象的な事象、コトを表している」。すなわち、「機能主義の立場」では、表面上類似した形式を有しているにもかかわらず、異なった機能を果たすため別構造として扱うのに対して、「形式が違っていても機能が同じであれば、二つの構造は同一視される」という考えである (プラシャント・柴谷 2020: 421)。

Shibatani (2019) は、体言化はメトニミーを認知基盤とする文法作用であると説明し、(18) のように定義している。

(18) 体言化の定義

a. Nominalization is a metonymy-based grammatical derivation process yielding constructions associated with a denotation comprised of entity (thing-like) concepts that are metonymically evoked by the nominalization structures such as events, facts, propositions, resultant products and event participants. (Shibatani (2019: 21))

「体言化はメトニミー（換喩）に基づいた文法的派生のプロセスであり、事実、命題、結果生産物、事象参与者など、体言化構造によってメトニミー的に喚起される存在物（モノ的）概念から成る外延（表示）と結びついた構文を生み出すものである。」

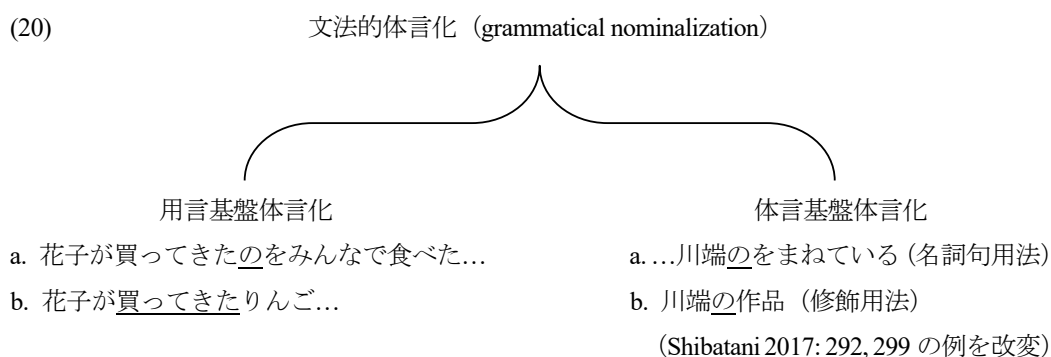
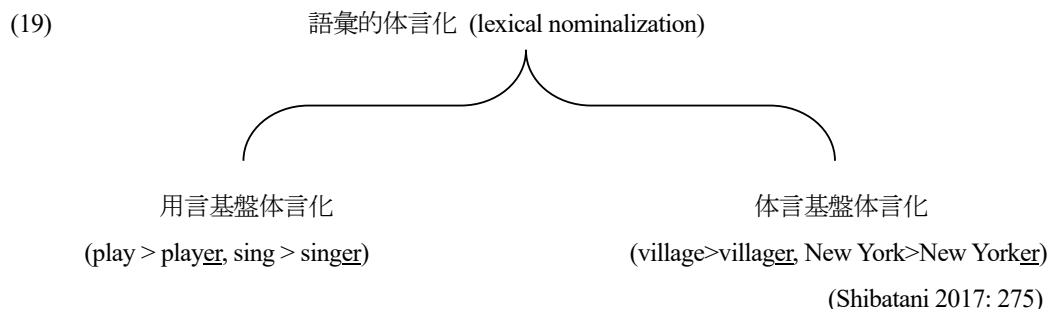
(堀江・秋田・北野 2021: 78)

b. Nominalization, as grammatical structures, are similar to nouns by virtue of their association with an entity-concept denotation; they both denote thing-like concepts, which provide a basis for the referential function of an NP headed by these nominals. (Shibatani (2019: 21))

「体言化は、文法的構造として、存在物概念の（明示的）意味と結びついている点で名詞と類似している。両者ともこれらの名詞相当形式を主要部とする名詞句の指示的機能の基盤を提供するモノ的概念を（明示的に）表す。」

(堀江・秋田・北野 2021: 78)

体言化はまず大きく「語彙的体言化 (lexical nominalization) と「文法的体言化 (grammatical nominalization)」の2種類に下位分類され、それぞれの下位範疇に「用言基盤体言化 (verbal-based nominalization)」と「体言基盤体言化 (nominal-based nominalization)」の2種類が存在する。語彙的体言化は品詞として名詞を作り出すが、文法的体言化は品詞的に名詞を作り出さないとされている (プラシャント・柴谷 2020: 422)。



体言化構造は一般的なメトニミーと同様に「さまざまな概念を表示し、具体的な使用状況に応じて、特定の概念表示が選択される」(プラシャント・柴谷 2020: 422)。例えば、通常のメトニミー表現として、*give me a half-pounder* における語彙的体言化の *a half-pounder* は、談話コンテキストによって「ハンバーガー、袋入り刻みタバコ、袋入りジェリービーンズ」のような表現の中から、適切な概念表示が選択される。同様に、文法的体言化においても、「事態 (event)」そのものや、「事態参加者」などが概念表示される。例えば、「花子を買ってきたのはうまかったよ」という例文において、その買った対象として、「りんご、スイカ」などのような事態参加者が概念表示され、談話コンテキストの中で適切な概念が選択される。

「語彙的体言化」と「文法的体言化」はさらにそれぞれ図 1 に示すように、「事態体言化 (event nominalization)」と「項体言化 (argument nominalization)」に下位分類される。

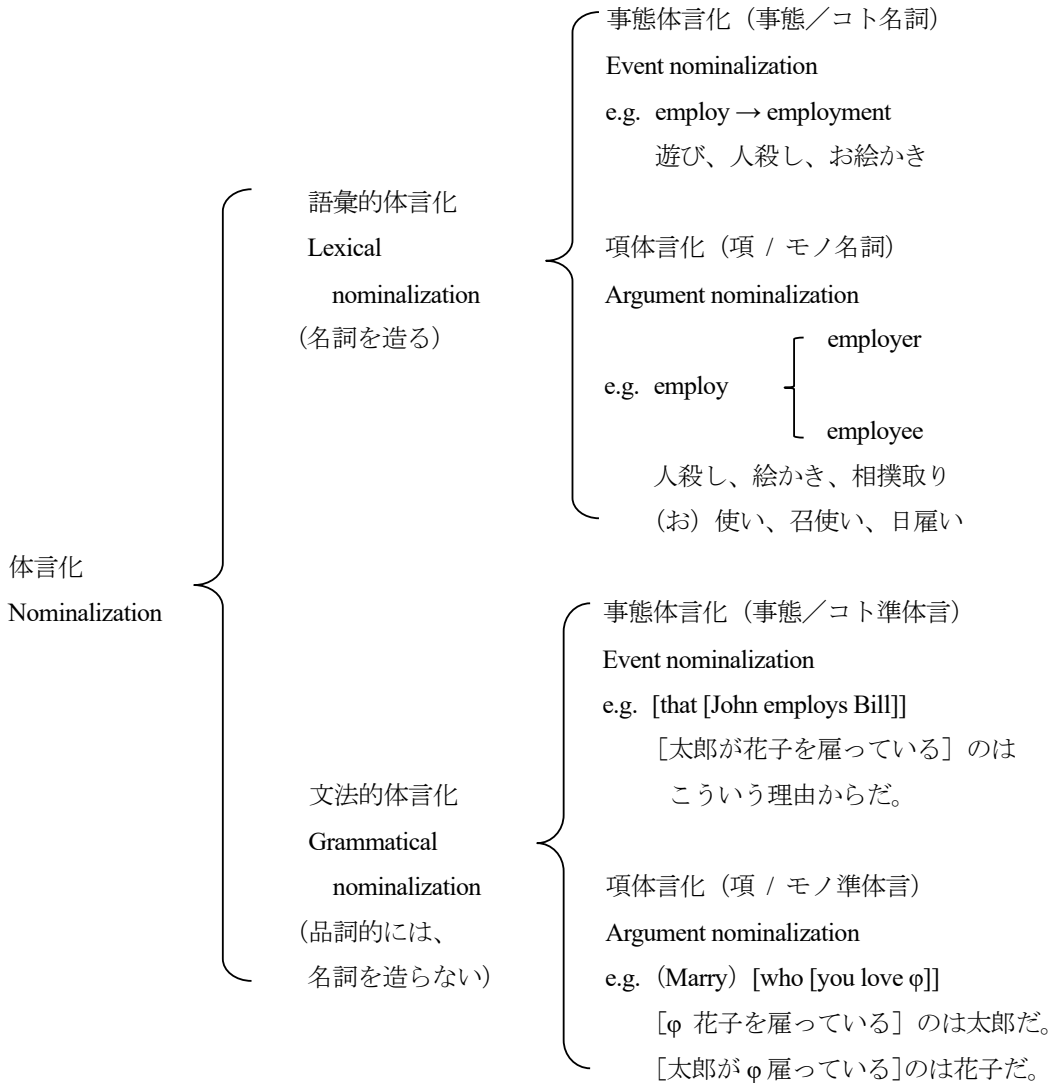


図 1. 用言基盤体言化構造の分類 (プラシャント・柴谷 (2020: 423))

文法的体言化構造は(「事態体言化」と「項体言化」はともに) 一般的な名詞と同様に (21)(22) (23) で示すように「名詞句用法 (NP use)」と「名詞修飾用法 (modification use)」を持つ (Shibatani 2017: 291-292)。

(21) 名詞の二つの用法

a. NP-use/Referential function

[[Inu]_N]_{NP} wa tyuuzitu_{na} doobutu da.
 dog TOP loyal animal COP
 ‘Dogs are loyal animals.’

b. Modification-use/Restrictive function

[[inu]_N [goya]_N]_N (noun compound) (cf. tori-goya ‘chicken coops’)
dog shack
‘kennel’

(22) 項体言化構造の二つの用法

a. NP-use / Referential function

[[[Hanako ga ϕ katte-kita]_{NMLZ} no]_{NMLZ}]_{NP} o minnade tabeta.
buying-came PRT ACC by. everyone ate
‘(Lit.) We ate all together what Hanako bought and came.’

b. Modification-use / Restrictive function

[[Hanako ga ϕ katte kita]_{NMLZ} ringo]_{NP} o minnade tabeta.
apple
‘(Lit.) We ate all together the apples that Hanako bought and came. (Shibatani 2017: 291-292)

(23) 事態体言化構造の二つの用法

a. NP-use / Referential function

[[[Takasi ga kekkonsite_ita]_{NMLZ} no]_{NMLZ}]_{NP} o daremo
NOM had.been.married PRT ACC even.a.single.person
siranakatta.
did.not.know
‘No one knew that Takashi had been married.’

b. Modification-use/ Identification function

[[Takasi ga kekkonsite ita]_{NMLZ} [zizitu]_N]_{NP} o daremo siranakatta.
fact
‘No one knew the fact that Takashi had been married.’ (Shibatani 2017: 292)

さて、アルメニア語の非定形名詞修飾表現のように、その文法的な位置付けや形式上の特徴が、従来の「関係節」、「補文」という立場から十分に捉えられていないのは、体言化理論によって、初めて包括的に整理可能にな。本稿では、アルメニア語の非定形動詞を体言化理論の観点から再検討し、当理論の有効性を主張する。

4. アルメニア語の先行研究における体言化の概要と本研究の立場

本節では、まずアルメニア語の伝統文法 (Petrosyan 1987, Asatryan 2004, Dum-Tragut 2009 など) において述べられてきた一般的な名詞と体言化について確認する。

2.1.1. 節では、アルメニア語の名詞について概観した。以下では、名詞以外の品詞の体言化に

ついて確認する。アルメニア語の文法では、品詞的に名詞ではないものに、数変化辞、定冠詞、格語尾、決定辞を結合させることによって体言化させるとされている。具体例として、例えば、(24) から (27) の場合は、定冠詞を結合させることによってそれぞれの品詞類が体言しているという考え方である。

(24) 形容詞 :

a. gelec'ik

beautiful

「美しい」

b. gelec'ikə

beautiful.NOM/ACC

「美しいの (が／を)」

(25) 助数詞 :

a. tas

ten

「数詞の十」

b. tasə

ten.NOM/ACC

「十の (が／を)」

(26) 序数 :

a. tasnerord

tenth

「十番目」

b. tasnerordə

tenth.NOM/ACC

「十番目の (が／を)」

(27) 人称代名詞 :

a. es

I

「私」

b. esə

I.NOM

「私 (定) (his ego)」

上述の品詞は通常の名詞と同様に数変化、格変化、人称接尾辞などの決定辞と結合することも可能であり、このような場合も体言化しているとされている。

しかし、体言化理論の分析枠組みを採用した本稿の立場では、(24) から (27) の品詞類に名詞特有の文法カテゴリーが与えられるということは、これらの品詞類は定冠詞や数変化辞などを伴うことによって体言化しているのではなく、元々体言同等のものであることから数変化や格変化ができるのであると考える。すなわち、以下 (28) における *lav* という形容詞は、通常の名詞と同様に複数化したり、格変化したりすることから *lav* が *good* という属性を表していると共に、モノを指す名詞としても機能するということである。

- (28) *lav*, *lav-er-ə*, *lav-er-i*, *lav-er-i-n*
good good-PL-DEF good-PL-GEN good-PL-DAT-DEF
 「良い、良い (複数物) が、良い (複数物) の、良い (複数物) に」

同様に、以下の (29) における不定詞も従来の考え方では、人称接尾辞や格変化辞を伴うことによって体言化しているとされてきたが、中には、Dum-Tragut (2009:112-115) のように、人称接尾辞が (30) のように、非定形動詞に結合すると、動詞に人名詞の概念を与えるという指摘や、所有接尾辞が (31) のように、非定形動詞に結合した際に、所有の概より、むしろ行為者の概を表すという興味深い指摘もある。

- (29) *gnalner-d* *galtni pahek'*. → 動詞の体言化
go.INF.PL-your secret keep.IMP.2PL
 「(あなた方が) 行くことを秘密にしてください。」
- (30) *gnac'omer-d* *havak'vek'* *aysteł.*
go.PTCP.SUBJ.PL-you gather.IMP.2PL here
 「(あなたたち) 行く人がここに集まってください。」
- (31) *gnal-s*
go.INF-my
 「私の行くこと」 “my going”
asac-d
say.PTCP.RES-your
 「あなたが言っていること」 “the thing said by you”
ənt'erc'ol-d
read.PTCP.SUBJ-you
 「あなたが読者として」 “you (as) reader”
gnal-ə
go.INF-his
 「彼／彼女の行くこと」 “his/her going”

以上の観察をまとめるとアルメニア語の体言化表現の特徴として (i) 格変化をする、(ii) 人称変化をする、(iii) 決定辞を伴う、(iv) 複数化をすることが挙げられる。結合要素の形態統語的な順序は (32) のようになる。

(32) 語幹+複数接辞+格語尾+定冠詞／人称決定辞

そこで、本研究では、(29) から (31) のように、人称決定辞を伴うと異なった解釈が生まれるというのは、次節で詳細に見ていくように、構文や接尾辞が接続される動詞語幹の意味ならびに体言化のタイプ（事態体言化か項体言化）との相関からであり、それぞれ異なった接尾辞と見なす必要がないという立場から分析を行う。そのため、以下では、所有接尾辞・人称接尾辞を合わせて「人称決定辞」と呼ぶことにする。

5. 体言基盤体言化構造

本節では、体言化理論の分析枠組みを援用し、以上で概観した定冠詞や決定辞は他の品詞類を体言化するものではなく、定冠詞は（すでに）体言化されているものを、「それは体言（準体言）であり、そしてそれは指示機能を果たしてお、その指示物は聞き手にとって同定できるものである」という情報を伝達する機能を果たしているという観点から、体言基盤体言化構造の再分析を試みる。また、従来、属格構文／所有構文とされてきた構文における属格接尾辞について、体言化理論に従って、体言化辞として捉え直す。まずは、属格接尾辞と体言化辞の関係について見られたい。

Shibatani (2019: sec. 7) は、属格は文法的体言化の現れとし、その本質は文法的な屈折にあるのではなく、文法的な派生にあると指摘している。すなわち、以下の $[[NP_1+GEN]+NP_2]$ という構造における、 $[NP_1+GEN]$ は、 NP_1 とメトニミー的に関係する新たな概念表示を派生している体言化構造であるという考えである。例えば、(33)(34) では、 $[par-i]$ 「ダンス (の)」と密接に関連するモノ（先生、靴、ドレス、学校など）を概念表示 (denote) するものとして分析される。

$[[NP_1-GEN]_{NMLZ}+NP_2]$ 構造

(33) $[[par-i]_{NMLZ} [dproc']_N]_{NP_2}$

dance-GEN school

「ダンスの学校」

(34) Sa erg-i dproc' ē, $[[par-in]_{NMLZ}-ə]_{NP_1}$ ayn šenkn ē.

this song-GEN school is dance-GEN.DEF-DEF that building.DEF is

「これは、歌の学校です。ダンスのはあちらの建物です。」

(33) は、 $[NP_1+GEN]_{NMLZ}$ の修飾用法で、主名詞 NP_2 の指示対象を限定する機能を果たして

いる（どのような学校でも概念表示の対象になっているのではなく、ダンスと関係するものと限定）。一方、(34) は [NP₁+GEN]_{NMLZ} が名詞句主部 (head nominal) として使われており（「名詞句用法」）、ここではダンスに密接に関与する様々な事物を指す指示機能を果たしているが、文脈によって「ダンスの学校」という解釈が与えられる。

同様に、(35) において、*Ašot-i, Aram-i* は体言基盤体言化であって、「アショット、アラム」がメトニミー的に関与する様々なもの（親族、所有物、作ったものなど）を概念表示 (denote) する。前者の *Ašot-i* はその修飾用法で、主名詞を限定する機能を果たしている。後者の *Arami-nə* は名詞句用法となっており、それに結合する後置冠詞が名詞句用法標識として、指示機能を果たしていることを明示している。

- (35) [[*Ašot-i*]_{NMLZ} k'uyra] mec ē, [[*Aram-in*]_{NMLZ}-ə]_{NP} p'ok'r.
 Ashot-GEN sister.DEF big is Aram-GEN.DEF-DEF small
 「アショット（男性名）の姉／妹は大きい、アラム（男性名）のは小さい。」

Shibatani (2017, 2018, 2019) は、体言化辞と名詞句用法標識の区別について、前者は名詞句用法と修飾用法の両方に現れるが、後者は修飾用法には現れず、名詞句用法にのみに現れると説明している。つまり、(35) の *Ašot-i, Aram-i* は修飾用法と名詞句用法のいずれにおいても属格の接尾辞を伴っているため、属格の接尾辞が（他の多くの言語と同様に）体言化辞として機能している。一方、定冠詞は名詞句用法においてのみ現れるため、名詞句用法標識であると判断できる。このことを日本語に当てはめて考えると、日本語では、名詞句用法・修飾用法のいずれにおいても同形態の「の」を用いるため、このような区別がより困難な状況を見せる。ただし、日本語の「の」に関しても、体言化辞の「の」→「の₁」、と名詞句用法標識の「の」→「の₂」が区別される。鄭 (2021) は、日本語のこれらの二種類の「の」は現代日本語の標準語において、(36a) のように並列して現れることがないが、関西方言では (36b) のように、準体助詞の「の₁」が「ん」に変わって現在も現れ続けるような現象が観察されると指摘している。(36b) を (37) のアルメニア語と比較すると両言語が平行的な構造を形成していることが分かる。

名詞句用法

- (36) a. [僕の₂]_{NMLZ} (の₁→φ)]_{NP} が一番良い。 (標準日本語)
 b. [僕の₂]_{NMLZ} ん]_{NP} が一番良い。 (関西方言)
 (鄭 2021: 210)

- (37) a. [[*im*]_{NMLZ} -n]_{NP} amena lavn ē.
 I.GEN-DEF most good.DEF is
 「私のが一番良い。」

² 「の₂」は（属）格助詞とされ、「の₁」は準体助詞とされる（鄭 2021: 200）。

- b. [[Ašot-in]_{NMLZ} -ə]_{NP} amena lavn ē.
 Ashot-GEN.DEF-DEF most good.DEF is
 「アショット（男性名）のが一番良い。」

両言語において観察される平行性が、用言基盤の体言化表現においても確認できる。例えば、(38) の日本語と (39) のアルメニア語を見られたい。(39 a, b) から分かるように、アルメニア語の定冠詞は [...]_{NMLZ} の外に起こるもので、通常の冠詞の用法のように、その前に来る要素は体言であることを示している。日本語の「[[僕が買った]_{NMLZ} の]_{NP}」の「の」と同様に、当該体言化構造（準体言）は名詞句用法として、指示機能を果たしているということを示す名詞句用法標識 (NP-use marker) であることが確認できる。

<用言基盤準体言>

- (38) a. [[僕が買った]_{NMLZ} の]_{NP} (はこれだ) (名詞句用法)
 b. [僕が買った]_{NMLZ} 本 (はこれだ) (修飾用法)
 (柴谷 2021: 465)
- (39) a. [[Im gnac]_{NMLZ} -ə]_{NP} (sa ē). (名詞句用法)
 my buy.PTCP.RES -DEF this is
 「私の買ったのはこれだ。」
 b. [Im gnac]_{NMLZ} girk'-ə (sa ē). (修飾用法)
 my buy.PTCP.RES book-DEF this is
 「私の買った本はこれだ。」

同様に、(40)(41)a. b. では、a. は形容詞と数詞の修飾用法であり、定冠詞を結合した b. の用法はそれぞれの名詞句用法に違いない。

- (40) a. gelec'ik calik
 beautiful flower
 「きれいな花」
 b. Gelec'ik-ə c'uyec' tur!
 beautiful-DEF sho give.IMP
 「きれいなを見せて。」
- (41) a. Nrank' tas hogi en.
 they ten people are
 「彼らは 10 人である。」
 b. Tas-n ekan.
 ten-DEF come.AOR.3PL

「10 (人) が来た。」

以上のように、定冠詞に先行する構造 ((39) の結果分詞や (40) の形容詞と見なされてきたものなど) は、通常の名詞と同じように、それぞれの名詞句用法において定冠詞によってマークされうるという事実は、定冠詞に先行する構造は体言類であるということを示す。

さて、アルメニア語の属格表現は、いわゆる二重属格、三重属格表現の場合において (37) よりさらに複雑な構造を持つ場合も観察される。次の所有表現の名詞句用法を見られたい。(42) の [] で括った部分における所有代名詞 *k'o* 「あなたの」というのが、さらに属格の体言化辞を伴い二重体言化構造を形成している (省略部を復元すると「あなたの笑いに」になる)。(43) の [] 内の要素は *im* (私の) という所有代名詞に二重の属格の体言化辞を伴わせている (省略部を復元すると「私の車の名前は」になる)。(44) の [] 内要素である *k'roj* 「姉の」という、すでに属格の概念を伴う名詞がさらに二重体言化を経た上で、語尾に話者との関係を明示する人称決定辞を結合させている (省略部を復元させると「私の姉の状態の方は」になる)。

(42) Or im cicalə es [[[k'on]_{NMLZ-i}]_{NMLZ-n}]_{NP} xainem].
 that my laugh.DEF I you.GEN.DEF-GEN-DEF mix.SUB.1SG
 「私の笑いをあなたのに混ぜる。」

(43) [[Im]_{NMLZ-in}]_{NMLZ-ə}]_{NP}³ «Honda», -250 jiauč.
 I.GEN-GEN.DEF-DEF Honda -250 horsepower
 「私のは「ホンダ」、-250 馬力である。」

(44) —Bayc' im vičakn aveli lav ē, k'an [[[[k'roj]_{NMLZ-i}]_{NMLZ-n}]_{NP}]-s,
 but my condition.the more good is than sister.GEN-GEN-DEF-my
 —asum ē Astlik tata.
 say is Astghik grandma.DEF

「しかし、私の状態は姉のよりましであるとアストギック (女性名) お祖母さんが言う。」

(EANC)

また、書き言葉としては使用されないが、話し言葉において、(45) のような、さらに複雑な構造で用いられる所有表現の体言化も観察される。

(45) a. [[[[[im]_{NMLZ-in}]_{NMLZ-in}]_{NMLZ-ə}]_{NP} [[[[[k'on]_{NMLZ-in}]_{NMLZ-in}]_{NMLZ-ic'}]_{NP}] ...
 my.GEN-GEN.DEF-GEN.DEF-DEF you.GEN.DEF-GEN.DEF-GEN.DEF-ABL
 (NP-use)

「私の X の Y の Z はあなたの X の Y の Z より...」

³ アルメニア語独自の句読点である。前置する文や語の説明を後置して書く際に用いる。

- a'. [[[im]_{NMLZ-in}]-in]_{NMLZ-i}] erkarut'yunə
 I.GEN-GEN.DEF-GEN.DEF-GEN length.DEF (Modification use)
 「私の X の Y の長さ。」

このような事実もまた、属格接辞によって派生された構造 [N-GEN] (例えば、(45) の [imi]) 自体が体言であることの証左であって、属格表現の体言化分析を支持するものである。

次に、上述した所有表現が人称決定辞と結合する場合について確認する。第4節において、用言(動詞、分詞、不定詞)に人称決定辞が結合するいくつかの例を観察した((29) から (31))。人称決定辞が当然体言に結合する場合もある。次の (46 a) は通常の「私の本」という所有表現である。(46 b) は (46 a) における1人称代名詞を人称決定辞で置き換えて、「私の本」という同様の解釈が得られる例である。(46*) は (46) の名詞句を修飾用法として用いた例である。この例文では、(46* b) から分かるように、人称決定辞が修飾する名詞に結合して、「本」が「私の所有物」であることを明示し、「名前」は「本」に属するという意味関係を成立させている。

- (46) a. *im* *girk-ə*
 my *book-DEF*
 「私の本」
- b. *girk-s*
 book-my
 「私の本」
- (46*) a. *im* *grk-i* *anun-ə*
 my *book-GEN* *name-DEF*
 「私の本の名前」
- b. *grk-i-s* *anun-ə*
 book-GEN-my *name-DEF*
 「私の本の名前」

一方、(47) のような、主名詞の属性を表す表現になると、観察される事実は変わってくる。まず、大きな相違点として、属性表現(形容詞)の修飾用法において、人称決定辞は修飾語ではなく、主名詞にのみ結合可能であるという点である。具体的には、(47 a) の「形容詞」の名詞句用法では、「私の美しい(の)」という表現から、「私の美しい娘」という解釈が自然に得られるが、(47 b) のように、1人称代名詞を人称決定辞で置き換えると、解釈として、「私の美しい(の)、(例えば、娘)」と「私自身である美しいモノ」という二重の解釈が得られてしまうということである。さらに、数詞を用いた(48)においては、(48 a) では「私の二人」という名詞句構造から「私の二人(の)(例えば子供)」という解釈が得られるが、(48 b) のように人称決定辞を用いた表現に置き換えると、所有の意味を表せなくなり、「二人の私たち」という意味の

みが成立する。このことは、(49) のように人称代名詞の複数形を用いた表現にすると、(49 a) では、「私たちの二人の (子供)」という所有の意味ではなく、「私たちである二人」という意味解釈が成立する。(49 a) を (49 b) のように置き換えた場合、(48 b) と同様の形態を持つことになり、両者においても「2人の私たち」という意味解釈が前景化され、「所有」の概念は背景化してしまうという現象が観察される。すなわち、属格に二つのタイプがあって、一つは、「N1 が密接に関連するモノ」を概念表示し、もう一つは「N1 であるモノ」を概念表示するということである。日本語の「松の枝」は前者で、「松の木」は後者に該当する。

(47) a. *im* *gelec'ik-ə*

my.GEN *beautiful-DEF*

「私の美しい (の)」

b. *gelec'ik-s*

beautiful-my

「私の美しい (の)、又は、私である美しいモノ」

(47') a. *im* *gelec'ik* *axjik-ə*

my *beautiful* *girl-DEF*

「私の美しい娘」

b. *gelec'ik* *aŋjik-s*

beautiful *girl-my*

「私の美しい娘」

(48) a. *im* *erkus-ə*

my *two-DEF*

「私の二人」

b. *erkus-s*

two-our (/my)

「私の二人」

(48') a. *im* *erku* *erexa-n*

my *two* *kid-DEF*

「私の二人の子供」

b. *erku* *erexa-s*

two *kid-my*

「私の二人の子供」

(49) a. *mer* *erkus-ə*

our *two-DEF*

「2人の私たち」

b. erkus-s

two-my / our

「2人の私たち」

(49')a. mer erku hogi-n

our two people-DEF

「2人の私たち／私たちの二人」

b. erku hogi-s

two people-our

「2人の私たち／私たちの二人」

以上の観察から、アルメニア語において従来属格の格変化辞とされてきた接辞は、体言基盤の体言化辞として機能していることが分かる。一方、名詞化機能を果たしているとされてきた定冠詞は、[...]NMLZの外に起こるもので、通常の冠詞の用法のように、それに先行する要素は体言であること（定冠詞であれば、聞き手が同定できるものであること）を示していることが分かる。

また、2.1.1 節の (3') のように、アルメニア語の伝統文法において、同一形態の接尾辞を人称接尾辞と所有接尾辞として分けて考えてきたのは、上述のような事情によるものと思われる。すなわち、分詞形動詞によって、決定辞が解釈の相違を生み出しているのは、あくまでも文脈の方であり、決定辞自体が異なった意味を表しているというわけではないと言えよう。

本節では、体言基盤体言化構造について考察した。次節では、用言基盤体言化構造について考察する。

6. 用言基盤体言化構造 (Verbal-based nominalization)

本節では、アルメニア語の用言基盤体言化について再検討する。6.1 節では、分詞形動詞による名詞修飾表現を項体言化構造として再分析し、その修飾用法と名詞句用法について考察する。6.2 節では、不定詞による名詞修飾表現を事態体言化構造として再分析し、その修飾用法と名詞句用法について考察する。

6.1. 分詞形動詞による項体言化

第3節で確認したように、アルメニア語の名詞修飾表現において用いられる分詞形動詞は結果分詞、主体分詞、未来分詞、未来分詞IIの四つである。本節では、結果分詞、主体分詞、未来分詞／未来分詞IIの順でそれぞれの体言化構造について考察する。

(i) 結果分詞の体言化

結果分詞は名詞修飾表現において、殆どの文法役割を表す名詞句を対象に、結果の体言化構造を形成する (クロヤン 2022)。以下に、結果分詞の名詞句用法、修飾用法の順で見ていく。

a) 名詞句用法

プラシャント・柴谷 (2020: 426) が指摘するように、以下の (50) から (54) と同様な構造を成す表現について、従来の研究者は通言語的に無主部関係節 (headless relative clause) として扱ってきた。しかし、体言化理論の観点では、こういった表現も名詞と同様に「事物指示の機能を果たす」、項体言化構造の名詞句用法と分析される。以下で確認するように、アルメニア語では、これらの表現が体言化しているということは、意味だけではなく形態統語的な面においても容易に証明できる。実際に、アルメニア語の文法において用言が複数形、決定辞 (定冠詞、所有接尾辞など)、格変化を伴って体言化しているという考えも、言い直すと、実際に体言であることから、上述のような曲用が可能になっているということである。

次の (50)、(51) は主語、(52)、(53) は目的語、(54) は斜格名詞句に対応する項体言化の例である。

(50) [[selanin dr-ac]_{NMLZ-ə}]_{NP} verc'rec'i.

table.DAT.DEF put-PTCP.RES-DEF take.AOR.1SG

「机 (の上) に置いてあったのを取った。」

(51) —Ehe'y,— blavum ē [[dřan mot kangn-ac]_{NMLZ -ə}]_{NP}.

Hey shout.PTCP.PRS is door.GEN nearby stand-PTCP.RES-DEF

「「ねえ」とドアの前に立っているのが叫ぶ。」

(52) [[Banak gnac'-ac]_{NMLZ-ner-in}]_{NP} p'oxarinelu hamar.

army go-PTCP.RES-3PL-DAT.DEF replace.INF.GEN in.order

「軍隊に行った人々を置き換えるために。」

(53) Et'e ostikanut'yanə dur č'i galis [[nkar-ac]_{NMLZ -d}]_{NP}

if police.DAT.DEF pleasant NEG come.PTCP.PROC paint-PTCP.RES-your

bant ein netum.

jail they were throw.PTCP.PRS

「警察があなたの描いた (もの) のが気に入らなければ、あなたを刑務所に入れた。」

(54) Kino, t'atron kam ayl hanrayin vayr ayc'elelis

movie, theater or other public place visit.PTCP.PROC

[[nst-ac]_{NMLZ -ner-in}]_{NP} mist demk'ov anc'ek'.

sit-PTCP.RES-PL.DAT.DEF always face.INST pass.IMP.2PL

「映画館、劇場、又はその他の公共の場所を訪れる時は、常に座っている (人々) に向き合
って通ってください。」 (EANC)

なお、上例の (53) では、結果分詞に2人称の人称決定辞 *-d* が結合している。この文を (53') のように1人称の立場からの発言に変更させると、2人称の接尾辞も1人称の接尾辞 *-s* で置き換えられる。一方、(53'') のように3人称に関する発言として変更させる場合には、3人称の

属格形主語が省略されると不自然な表現になる。このことから、3人称の表現において現れる決定辞は所有接尾辞ではなく定冠詞であることが分かる。同様に (53) や (53') における決定辞を1人称代名詞、2人称代名詞に置き換えると、結果分詞に同様な定冠詞が結合されるということからも確認できる。そして、これらの表現では、結果分詞の目的語の位置が空所になるため、結合する決定辞は所有物を表すような意味合いを持つようになる。このことは、主語名詞句を対象とした結果分詞の名詞句用法であれば、これらの決定辞が行為者の概念を含意するということになる。すなわち、これらの決定辞は、人称接尾辞と所有接尾辞として分類されてきたのは、構造から産まれる意味的な相違がそう思わせたのであるということについて再確認できる。

- (53') Et'e ostikanut'yanə dur ė'i galis [nkar-ac]_{NMLZ-S}]_{NP} ...
 if police.DAT.DEF pleasant NEG.is come.PTCP.PROC paint-PTCP.RES-my
 「警察が私の描いた (もの) のが気に入らなければ...」
- (53'') Et'e vostikanut'yanə dur ė'ēr galis [Aram-i
 if police.DAT.DEF pleasant NEG.was come.PTCP.PRS Aram-GEN
 nkar-ac]_{NMLZ-ə}]_{NP}, bant ėin netum.
 paint-PTCP.RES-DEF jail they were throw.PTCP.PRS
 「警察がアラムの描いた (もの) のが気に入らなければ、彼を刑務所に入れる。」

以上の構造を、5節で論じた、所有表現と比較すると、(56) のように、目的語を対象とする結果分詞は (55) の名詞と同様に、所有物の概念を表す。一方、主語名詞句を対象とした場合は、形容詞や数詞を用いた表現のように行為者の概念が前景化される。場合によっては、所有の概念と人称の概念が同じ形態で表されるので、文脈によって判断されるということになる。

- (55) a. *im* girk'-ə
 my book-DEF
 b. girk'-s (名詞)
 book-my
 「私の本」
- (56) a. *im* nkar-ac-ə
 my paint-PTCP.RES-DEF
 b. nkar-ac-s
 paint-PTCP.RES-my
 「私の描いた物」

上例の観察から、[] で括った結果分詞自体は、通常の名詞と同様に数変化、格変化、決定辞

を伴うことから、モノやヒトを概念表示する、項体言化の名詞句用法に該当することが分かる。次に、結果分詞構造が修飾要素として働く場合について考察する。

b) 修飾用法

結果分詞の名詞句用法において分詞に結合する、いわゆる人称決定辞は (57) (58) のように修飾用法においても現れる場合がある。このことから、一部の表現において人称決定辞は体言化構造の一部、体言化辞として機能していることが予測できる。つまり、[im gnac'-ac][gnac'-ac-s] (両方とも「私の行った」) は英語の 'my going' のように、同等の体言化構造であると考えられる。

- (57) a. Im gnac'-ac čamban
 my go-PTCP.RES way.DEF
 b. gnac'-ac-s čamban
 go-PTCP.RES-my way.DEF
 c. ??gnac-ac čamba-s
 go-PTCP.RES way-my
 「私の行った道」

- (58) [[erek gn-ac-ner-d]_{NMLZ} grk'-er-ə] drec'i paharani mej.
 yesterday buy-PTCP.RES-PL-your book-PL-DEF put.AOR.1SG shelf.GEN in
 「昨日 (あなたたちが) 買った本を (私が) 棚に入れた。」

(57) (58) における結果分詞は、5 節で論じた通常の所有表現と異なった振る舞いを見せる。具体的には、通常の所有表現は、修飾用法において、人称決定辞を主名詞の方に結合させるが、(59 a) から分かるように、一部の結果分詞の場合においては、主名詞に人称決定辞を結合させた表現は不自然であり、(59 b) のように結果分詞に人称決定辞を結合させる必要がある。同様に、(60 b) において、人称決定辞が修飾する結果分詞に結合し、主名詞に結合した表現は (59 a) と同様に不自然になる。

- (59) a. ??gnac'-ac čamba-s
 go-PTCP.RES way-my
 b. gnac'-ac-s čamban
 go-PTCP.RES-my way.DEF
 「私の行った道」
 (60) a. im nkarə
 my picture.DEF

b. nkar-s

picture-my

「私の絵」

(60') a. im nkar-ac

nkarə

my paint-PTCP.RES picture.DEF

b. nkar-ac-s

nkarə

paint-PTCP.RES-my picture.DEF

「私の描いた絵」

ただし、上述のような現象は全ての結果分詞に対して観察されるわけではなく、(61) のような一部の結果分詞はこれと逆の振る舞いを見せる。具体的には、(61 a) における1人称所有代名詞を(61 b) のように、人称決定辞と置き換えると、以上の(59)(60)とは異なり、所有接尾辞は主名詞に結合され、結果分詞に結合できなくなる。結果分詞のこのような振る舞いは、(62) における形容詞と同等である。では、結果分詞が名詞修飾用法において異なった振る舞いを見せているということは、分詞が表している意味と関係していると思われる。すなわち、同じ分詞が、属性(形容詞的)の意味を表す場合と、行為・出来事を表す場合は体言化構造において、異なったマーキングパターンを有するということである。

(61) a. Im hogn-ac tesk'ə

my tired-PTCP.RES look.DEF

b. hogn-ac tesk'-s

tired-PTCP.RES look-my

「私の疲れた見た目」

(62) a. Im gelec'ik afjikə

my beautiful daughter.DEF

b. gelec'ik afjik-s

beautiful daughter-my

「私の美しい娘」

なお、上述した現象は名詞句用法と同様に、(63) のような1人称と、(64) のような2人称に関わる表現において観察できる文法現象であり、(65) のような3人称に関する表現では、主語・動作主の省略が不可能になっているため、こういった区別が形態上確認できない。

(63) [[Erek gn-ac-ner-s] grk'erə] drec'i paharani mej.

yesterday buy-PTCP.RES-PL-our book.PL.DEF put.AOR.1SG shelf.GEN in

「昨日私たちの買った本を棚に入れた。」

- (64) Erek gn-ac-ner-d grk'erə drec'i paharani mej.
 yesterday buy-PTCP.RES-PL-your book.PL.DEF put.AOR.1SG shelf.GEN in
 「昨日あなたたちの買った本を（私が）棚に入れた。」
- (65) [[Erek Arami gn-ac(ner)-ə]_{NMLZ} grk'erə] drec'i
 yesterday Aram.GEN buy-PTCP.RES(PL)-DEF book.PL.DEF put.1SG.AOR
 paharani mej⁴.
 shelf.GEN in
 「昨日アラムの買った本を（私が）棚に入れた。」

結果分詞の修飾用法と名詞句用法において観察される大きな相違点として、結果分詞に結合する複数形の現れも挙げられる。名詞句用法において (52)、(54) のように、分詞に結合する複数形は、結果分詞が数えられる（単複の区別がつけられる「モノ」を概念表示している）、すなわち、体言であることを容易に確認できるが、修飾用法において結合する数変化辞は、結果分詞の動作主・主語の複数を表すことになる。このことは、(65) を (66) のように人称決定辞を独立した所有人称代名詞（人称代名詞）の属格形に置き換えた際に、結果分詞の数変化辞が付かないことから確認できる。

- (66) [[Erek mer gn-ac(*-ner)]_{NMLZ} grk'-er-ə] drec'i paharani mej.
 yesterday our buy-PTCP.RES(-PL) book-PL-DEF put.AOR.1SG shelf.GEN in
 「昨日私たちが買った本を棚に入れた。」

以上は、結果分詞構造が体言化理論の枠組みにおいて、項体言化の名詞句用法と修飾用法に該当することを確認できた。次に、主体分詞の体言化について考察する。

(ii) 主体分詞：主語・動作主の体言化

主体分詞は、主語・動作主の項体言化構造を形成し、主体分詞を主要部とする修飾節の主語位置に空所が起こる（クロヤン 2022）。以下では、名詞句用法と修飾用法について順に再検討する。

a) 名詞句用法

以下の名詞句用法における主体分詞は、いずれも主語に当たるモノ・ヒトを概念表示する項体言化の例である。すなわち、(67) では [] で括った主体分詞の複数形に与格の格変化辞が結合し、「戦っている人たちを」のようにヒト名詞の概念を表示する。(68) の [] で括った部分は、「到着する人の数」のように、二重属格表現としてヒトとモノの2つの重複した概念を表示する

⁴ 3人称は無標であるが、特に誰の行為かをこだわらない場合もこの形態を使用し、行為者が文脈依存的な解釈になる。

名詞句用法である。

- (67) Ibr Amerikan mijamtum ē gorcin ew
 as.if America.DEF intervene.PTCP.PRS is affair.DAT.DEF and
 haštec‘num [k'iv-ol-ner-in]_{NMLZ.NP}
 reconcile.PTCP.PRS fight-PTCP.SUBJ-PL-DAT.DEF

「アメリカが問題に干渉しているようなふりをして、戦っている人々を和解させるようにする。」

- (68) ...mekn-ol-ner-i t'ivə mist gerazanc‘um ēr
 leave-PTCP.SUBJ-PL-GEN number.DEF always exceed.PTCP.PRS was
 [žaman-ol-ner-in]_{NMLZ.NP} tarekan 40-60 hazar anjov.
 arrive-PTCP.SUBJ-PL-DAT.DEF annually 40-60 thousand person.INST

「出発者の数は常に到着者の数を4万から6万人上回っていた。」 (EANC)

(69) では、主体分詞の指示対象が「血管に流れる血」を意味しているので、モノ体言化構造である。(70) の分詞構造が概念表示しているモノは「アイスクリーム、チョコレート」などのような「溶ける性質のある」モノであると想定可能であるが、具体的には談話の中で明示させる必要がある。

- (69) [...eraknerum hos-ol]_{NMLZ-ə}_{NP} amenaverjūm ē p'oxvum.
 vein.PL.LOC flow-PTCP.SUBJ-DEF very_end is change.ANTIC.PTCP.PRS
 「血管に流れている (もの) のは最後の最後に変化する。」 (EANC)

- (70) [[halv-ol-ner]_{NMLZə}]_{NP} dir sařnaran.
 melt-PTCP.SUBJ-PL-DEF put.IMP.2SG refrigerator
 「{溶け始めている／溶けやすい} のを冷蔵庫に入れなさい。」

なお、主体分詞に結合する人称決定辞が行為者の概念を表しているのも、主体分詞が主語名詞句を対象にしていることに起因する。そして、主体分詞は代名詞を (72 c') のように直接的に修飾できないことから、(71) のような人称決定辞の解釈が発達したと考えられる。

- (71) Dproc' gnac'-ol-ner-d havak'vek' aystel.
 school go-PTCP.SUBJ-PL-your gather.PL.IMP here
 「あなたたちの (Iで) 学校に行くのはここに集まってください。」

- (72) a. Dproc' gnac'-ol erexa-ner-ə havak'vek' aystel.
 school go-PTCP.SUBJ kid-PL-DEF gather.IMP.2PL here
 「学校に行く子供たちはここに集まってください。」

- b. Erex-a-ner-ə dproc' en gnum. (元の文)
 kid-PL-DEF school are go.PTCP.PRS
 「子供たちが学校に行く」
- b'. [dproc' gnac'-oŋ] erex-a-ner-ə... (修飾用法)
 school go-PTCP.SUBJ kid-PL-DEF
 「学校に行く子供たち」
- c. Duk' dproc' ek' gnum. (元の文)
 you.PL school are go.PTCP.PRS
 「あなたたちが学校に行く」
- c'. *Dproc' gnac'-oŋ duk'... (修飾用法)
 school go-PTCP.SUBJ kid-PL
 「学校に行くあなたたち」

以上の主体分詞は、名詞句用法において、結果分詞と同様に数変化辞・格変化辞・定冠詞を結合させているということから、体言同等のものであると確認できる。次に、主体分詞の修飾用法について考察する。

b) 修飾用法

主体分詞の名詞修飾用法においては主名詞が3人称表現に限定されるため、以上で観察した、人称決定辞 (-s, -d) が付かないという点で結果分詞との相違が観察される (73) (74)。

(73) [Ayntel xalac'-oŋ]_{NMLZ} erexan imn ē.
 there play-PTCP.SUBJ child.DEF my.DEF is
 「あそこで遊んでいる子供は私のだ。」

(74) [Valə žaman-oŋ]_{NMLZ} patvirakut'yunə
 tomorrow arrive-PTCP.SUBJ delegation.DEF
 「明日到着する代表団」

しかし、上の主体分詞の名詞句用法の構造が、その形態でさらに名詞を修飾するような、いわゆる二重属格体言化構造を成立させているような場合は、明確な体言化構造の修飾用法であることが確認できる。(75) では [] で括った NP₁ の部分が「出発する(複数の)人」を概念表示し、それがさらに属格 *-in* によって体言化され、出発する人々と関連するもの(ここでは「量」)が主名詞「数」を限定修飾している(不特定の数でなく、出発する人たちの量に限定された数)。

(77) では (75) における同様の「出発する(複数の)人の」という主体分詞の体言化構造は主名詞の「グループ」という集合名詞を修飾している。こういった表現では、主体分詞の体言化は明確に現れている。すなわち、(75) の問題の部分 [meknoŋ-ner]_{NMLZ} 「出発するモノたち」は、

(76) の通常の名詞「子供たち」と同等に体言として機能している。

(75) ...[[[mekn-ol-ner]_{NMLZ}]_{NP1-i}]_{NMLZ} [t'iv-ə]_N_{NP} mist gerazanc'um ēr...
 leave-PTCP.SUBJ-PL-GEN number-DEF always exceed.PTCP.PRS was
 「…出発するモノの数が常に上回っていた…」

(76) erexa-ner-i t'iv-ə mist gerazanc'um ēr...
 kid-PL-GEN number-DEF always exceed.PTCP.PRS was
 「子供たちの数が常に（期待より）上回っていた…」

(77) ...Petrosn u ir k'uyrə gtnv-um ēin
 Petros.DEF and his sister.DEF be-PTCP.LOC they.were
 [[mekn-ol-ner-i]_{NMLZ}_{NP1} xmbi]_{NP2} mej.
 leave-PTCP.SUBJ-PL-GEN group.GEN in
 「…ピーターと彼の {妹/姉} は出発する人々のグループ内にいた。」

以上、主体分詞の名詞句用法と修飾用法について考察した。次に、アルメニア語の未来分詞／未来分詞Ⅱが形成する体言化構造の名詞句用法と修飾用法を考察する。

(iii) 未来分詞／未来分詞Ⅱ

未来分詞は原則として目的語名詞句を修飾対象にしている (クロヤン 2022)。このことから、未来分詞を目的語体言化構造と見なすことができる。

a) 名詞句用法

(78) と (79) の例において、[] で括った未来分詞 (-*elu/-alu*) は定冠詞 (名詞句用法標識) と結合していることから体言であることが確認できる。(78) に所有 (属格) 構造を与えると、(78') のように、体言基盤の所有表現と同様になる。(79) のような場合は、分詞に前置する所有代名詞 *k'o* 「あなたの」を人称決定辞に置き換え可能である。さらに、主名詞が可算名詞である場合は、複数形を与えることもできる。この点で、以上で観察した、結果分詞と主体分詞と同様の体言化の度合いを見せる。

(78) Hayastanum vorogman ĵri pahanĵarkə 3 angam aveli ē,
 Armenia.LOC irrigation.GEN water.GEN demand.DEF 3 times more is
 k'an [xm-elu-]_{NMLZ-nə}_{NP}.
 than drink-PTCP.FUT-DEF
 「アルメニアの灌漑用水の需要は飲料水 [=飲むモノ] より3倍ある。」

<https://www.ecolor.org/>

(78')a. [xm-elun]_{NMLZ-in}_{NMLZ-ə}_{NP} dir aystel.

drink-PTCP.FUT.DEF-GEN.DEF-DEF put.IP.M.2.SG here

「飲むのの [飲むモノのモノ] をここに置きなさい。

b. [xm-elun]_{NMLZ-in}_{NMLZ-ic}_{NP} ber.

drink-PTCP.FUT.DEF-GEN.DEF-ABL bring.2SG.IP.M

「飲むのの [飲むモノのモノ] から持ってきて。」

(79) Ba k'ez petk' ēr, jend ktrac [k'o [sark'-elu-nə]_{NMLZ.NP}
 - you.GEN need was voice.your cut.PTCP.RES your make.PTCP.FUT-DEF
 ksark'eir, kaseir ekek' kerek'.

COND.make.PAST.2SG COND.say.PAST.2SG come.IMP.2PL eat.IMP.2PL

「あなたにこれ必要だったのかい、黙って、(あなたの) 作るモノを作って食べに来なさい
 と言えばよかったのに。」 www.facebook.com

(80) と (81) では未来分詞 II (-ik') の名詞句用法であるが、これらの分詞は語彙的体言化が進んでおり、品詞として名詞を生み出している例も多く見られる (*utelik'* 「食べ物」、*anelik'* 「やるべきこと」、*stanalik'* 「もらうべきもの」)。

(80) Korošenk' [[anelik'-ner]_{NMLZ} -s]_{NP}.
 COND.decide.1PL do-PTCP.FUT2-PL -our

「私たちのするべきことを決める。」

(EANC)

(81) Or barjrac'el em aysteł' čem ijni minčew
 if get_up.PTCP.PRF am here NEG.I.am get_down until
 [asel-ik']_{NMLZ-s}_{NP} časem.
 say-PTCP.FUT2-my NEG.say.SUB.1SG

「ここに上ったのであれば、(私の) 言わなければならないことを言わない限り降りません。」

(EANC)

以上、名詞句用法について考察した。次に、未来分詞／未来分詞IIの修飾用法について考察する。

b) 修飾用法

未来分詞 II は、全ての修飾用法において人称決定辞と結合しないという性質の面で主体分詞を除いて、形容詞と一部の結果分詞と類似性を見せている。このことは、未来分詞 II は、分詞の中で、より高程度の形容詞らしさを有するというを示唆する。

(82) Yurak'anč'yura patčarabanec' hajord ōrva hamar
 everyone.DEF reason.AOR.3SG next day.GEN for

[ir [[anel-ik']_{NMLZ} canr ašxatank'ə]].

his/her do-PTCP.FUT2 heavy work.DEF

「みんな翌日にしなければならぬ大変な仕事があることを理由にしていた。」 (EANC)

(83) Uzum em ayc'elel hamalsaranakan ənkerəj ew xorhrdacc'el nra

want am visit.INF university friend.GEN and discuss.INF his

het [[grel-ik']_{NMLZ} diplomayin ašxatank'is] masin.

with write-PTCP.FUT2 diploma work.GEN.my about

「大学の友達を訪ねて、書かなければならぬ論文について相談したい。」 (EANC)

一方、未来分詞 (-*elu/-alu*) の修飾用法に関しては、(84) や (85) のように、主名詞が1人称と2人称に該当する場合は人称決定辞 (-*s*, -*d*) と結合可能であり、この点で未来分詞Ⅱと相違点を見せている。例えば、(86) において、未来分詞Ⅱと未来分詞のいずれの使用も可能であり、未来分詞Ⅱ *ularkelik'* を使用した際には、その語尾に所有接尾辞 (-*s*) を結合させることができないが、未来分詞 *ularkelu* を使用した文においては、結合可能になっている。

(84) Ašxatavayrerics' mekə [[marmare ew granite k'arer

workplace.PL.ABL.my one.DEF marble and granite stone.PL

ktr-elu(s)]_{NMLZ} arhestanoc' ēr' mut' ew p'ošot mi vayr, ortel

cut-PTCP.FUT workshop was dark and dusty a place where

mot tasə hogi ēink'.

around ten.DEF person we.were

「職場の一つは、大理石と花崗岩を切る場所だった。古くて、ほこりの多い場所に我々が10人ぐらいた。」 (EANC)

(85) ...dasavorum hodvacnerə [[hamapatasxan bažanordnerin

sort.PTCP.PRS article.PL.DEF relevant subscriber.PL.DAT.DEF

ulark-elu-s)]_{NMLZ} t'ert'i ktrvac'k'nerə].

send-PTCP.FUT-my newspaper.GEN clipping.PL.DEF

「記事や購読者ごとに送信する新聞の切り抜きを並び替えたりして…」 (EANC)

(86) [[Valn ularkel-ik' / ulark-elu(s)]_{NMLZ} namakə grec'i.

tomorrow send-PTCP.FUT2 / send-PTCP.FUT(my) letter.DEF write.AOR.1SG

「明日送る手紙を書いた。」

未来分詞Ⅱと結果分詞の一部が、修飾用法において人称決定辞と結合できないのはの形容詞性の度合いの他に名詞性の度合いも関わっていると考えられる。すなわち、未来分詞Ⅱは分詞の中で、最も語彙化、つまり「語彙の体言化 (lexical nominalization)」を進めた分詞の一つであり、未来分詞Ⅱに人称決定辞を結合させるとモノ的な概念が強く現れ、二重に「物」を主名詞

として付けるようになり、不自然な表現になってしまう。例えば、*anel-ik'-s*「私のやるべきこと」と言えば、そこに、すでに、モノ（最も密接に関係する「仕事」という概念が生み出される）の概念が含まれており、さらなるモノを付け加えると「私のやるべきこと仕事」のように、不自然な表現になってしまう。同様に、*uxarkel-ik'-s*「私の送るべき物」で、「送るべき物手紙」のように言えない。さらに、これらの分詞形を (87 a) のように属格の所有表現にすると、(87 b) のような、通常の名詞と同様に、属格の体言化辞を伴った上で、人称決定辞と結合可能になるという振る舞いを見せることから名詞同等の振る舞いをする事が分かる。

- (87) a. [asel-ik']_{NMLZ} -i (-s)_{NMLZ} imastə
 say-PTCP.FUT2 -GEN (-my) meaning.DEF
 「私の言うべきことの意味」
- b. [grk']_{NMLZ} -i (-s)_{NMLZ} imastə
 book -GEN (-my) meaning.DEF
 「私の本の意味」

さて、一部の形容詞性の高い結果分詞も、実際は語彙的体言化が進んだものである (*xorovac vac* (文字通りの意味は「焼いた (……)」、単独で使用された時の意味は「焼肉」) → *xorovac mis*「焼肉」)。このような分詞に人称決定辞を結合させると「物」の概念が前景化され、出来事、属性、状態という概念は背景化される。従って、「属性」という側面に焦点を与えたい表現においては、人称決定辞と結合できないという現象が発達していると考えられる。つまり、名詞性や形容詞性の高い分詞は、通常形容詞と名詞のように文法的体言化のプロセスを経っていない限り、人称決定辞と結合できないということである。

以上の考察から、アルメニア語の名詞修飾表現において現れる分詞は、体言化理論の枠組みにおける項体言を形成させていることが確認できる。結果分詞と主体分詞はヒト・モノ、いずれの概念表示も可能な分詞であるが、未来分詞／未来分詞Ⅱは共にモノの概念のみ表示する。このことから、時制的に未来を表す表現において、ヒト名詞を概念表示する場合は未来分詞／未来分詞Ⅱではなく、主体分詞が用いられるという現象も説明できる。

一方、一部の分詞（結果分詞の一部、主体分詞、未来分詞Ⅱ）に関しては、文法的体言化のプロセスを超えて、語彙的体言化が進んでいる場合は、通常の名詞と類似した振る舞いを見せる場合と、属性を表す分詞は通常形容詞と類似した振る舞いを見せる場合が確認できる。また、人称決定辞の付き方に関して、名詞と名詞以外の品詞類に対して、いずれも *NMLZ* が密接に関与しているモノであり、体言基盤では、N1 のモノ・事態と密接に関連するもの、用言基盤では、動詞語幹の概念（行為）と密接に関連するもの、つまり事態参与者である動作主や対象物や結果などを表していることが分かる。すなわち、体言基盤、用言基盤と共に密接に関係するものが概念表示されるが、インプット（体言又は用言語幹）によって、概念表示されるものが違ってくるということである。従って、所有接辞（体言基盤のもの）と人称接辞（用言

基盤のもの)を区別する必要はないと考えられる。

次節では、体言化理論の枠組みにおける事態体言化に該当する不定詞構文を考察する。

6.2. 事態体言化 (event nominalization)

事態(コト)体言化は不定詞によって実現される。不定詞に関しては前節で考察した分詞の振る舞いと類似した部分と相違する部分が観察される。相違点として、以下で見ていくように、不定詞が元々出来事名詞であるため、分詞構文と比べてより高い名詞性を見せるという点が挙げられる。不定詞が品詞的に体言と同様の振る舞いをする例として、(88)における、*ergel*「歌う」という不定詞が形態変化を伴わずに直接目的語になっていることや、(89)における *gnal*「行く」という不定詞が、通常の体言と同様に奪格の格変化を伴っていることから確認できる。

(88) *erg-el* *šat* *em sirum*.
 sing-INF a lot am like.PTCP.PRS
 「歌うのが大好き。」

(89) *gn-al-uc⁶* *vaxenum* *em*.
 go-INF-ABL scare.PTCP.PRS I am
 「行くのは怖い (lit.行くことから怖がっている)。」

このような特徴から、不定詞は「名詞句用法」・「修飾用法」において、通常の体言と同様の振る舞いをするのが予測される。以下に、それぞれについて確認する。

a) 名詞句用法

以下では、人称接尾辞を所有代名詞と置き換えた (91) と (92) の例文から、人称決定辞が、属格名詞句を表現しているということが分かる。

(90) [*Ašot-i* [*durs gal*]_{NMLZ-ə}]_{NP} *tesa*.
 Ashot-GEN out come-INF-DEF see.AOR.1SG
 「アショットの出てくるのを見た。」

(91) a. [[*Durs gal*]_{NMLZ-s}]_{NP} *tesav*.
 out come-INF-my see.AOR.3SG
 「(私の) 出てくるのを (第三者が) 見た。」

b. [*Im* [*durs gal*]_{NMLZ-ə}]_{NP} *tesav*.
 my out come-INF-DEF see.AOR.3SG
 「私の出てくるのを (第三者が) 見た。」

(92) a. [[*Durs gal*]_{NMLZ-d}]_{NP} *tesav*.
 out come-INF-your see.AOR.3SG

「(あなたが) 出ていくの (第三者が) 見た。」

b. [K'o durs gal]_{NMLZ-ə}NP tesav.

your out come.INF-DEF see.3.AOR

「あなたの出ていくの (第三者が) 見た。」

b) 修飾用法

修飾用法における不定詞は属格の体言化辞を伴っており、通常の名詞と同様の振る舞いを見せる。そして、不定詞は他の構文に比べて名詞が高いという性質が、名詞としてメトニミックな関係が作られる幅がより広いと予測できる。さらに、時制的に縛られていないという特徴も不定詞の「外の関係」や「短絡的な」表現のようなものにおいて使用される基盤になっていると思われる (クロヤン・堀江 2020、クロヤン 2022 など)。

(93) [[erkar trainer artasahmanum apr-el-u]_{NMLZ} ardyunk'-ə]...

long year.PL abroad.LOC live-INF-GEN result-DEF

「[[長年外国に住む/住んだ] 結果] ...」

(93') [[[erkar trainer artasahmanum apr-el-u]_{NMLZ-S}]_{NP} ardyunk'-ə]...

long year.PL abroad.LOC live-INF-GEN-my result-DEF

「(私の) [[長年外国に住む/住んだ] 結果] ...」

以上の考察から、従来アルメニア語伝統文法や近年の生成文法などの取り扱いでは、非定形動詞による名詞修飾表現の本質を十分に捉えることができなかつた根本的な問題点に対して、体言化分析が明確な答えを与えてくれることが明らかとなった。

7. 結論

本稿では、アルメニア語の体言基盤・用言基盤体言化の名詞句・名詞修飾用法について、Shibatani (2017, 2018, 2019) が提案した「体言化理論」の観点から再検討し、分詞による名詞修飾表現と不定詞による名詞修飾表現は、それぞれ「項体言化構造」と「事態体言化構造」に当てはまることを明らかにした。

第5節では、まず従来の属格・所有表現を体言化理論の観点から再検討し、アルメニア語の属格・所有表現が体言基盤体言化であると主張した。そして、第6節では、分詞、不定詞構文は、体言基盤体言化をモデルに発達した用言基盤体言化であると主張した。

また従来、定冠詞や人称決定辞は他の品詞類を体言化するものとされてきたのに対して、定冠詞は (すでに) 体言化されているものを、「それは体言 (準体言) であり、そしてそれは指示機能を果たしており、その指示物は聞き手にとって同定できるものであ」という情報を伝達しているという機能を果たしており、人称・所有接辞は分詞によって事態参与者や対象物や結果を示す機能を果たしていることを確認できた。

さらに、体言基盤の体言化構造の場合は、属格接辞が体言化辞として機能しており、用言基盤（動詞語根）の場合には分詞の形態素が体言化辞であることを明らかにした。

従って、不定詞が通常の体言と同様に体言化辞（いわゆる属格接尾辞）を伴って名詞修飾の機能を果たしているということは、不定詞が分詞より名詞性が高いということに由来する現象であると主張した。

ただし、一部の分詞（結果分詞の一部、主体分詞、未来分詞Ⅱ）では、文法的体言化のプロセスを超えて、語彙的体言化が進んでおり、両体言化の連続性を示唆する。

そして、一部の「属性」の意味を表す分詞に関しては、形容詞と同様に、主名詞を必須項とするため、体言化構造としての独立性を有しないということも体言化分析によって明らかになったが、この点に関しては更なる検討が必要であると考えられる。

参考文献

- Asatryan, Manvel 2004. *Žamanakacic‘ hayoc‘ lezu* (Modern Armenian Language). Erewan. Erewani hamalsarani hratarakč‘ut‘yun.
- Baker, Mark 2003. *Lexical Categories: Verbs, Nouns and Adjectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard 1996. “The Unity of Noun-Modifying Clauses in Asian Languages.” *Pan-Asiatic linguistics: Proceedings of the 4th International Symposium on Languages and Linguistics*. 1077-1088. Salaya, Thailand: Mahidol University at Salaya.
- Comrie, Bernard 2002. “Typology and Language Acquisition: The Case of Relative Clauses.” In Anna Giacalone Ramat (ed.), *Typology and Second Language Acquisition*. 19-37. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Comrie, Bernard 2008. “Prenominal Relative Clauses in Verb-Object Languages.” *Language and Linguistics* 9. 723-733.
- Comrie, Bernard and Edward L. Keenan 1979. “Noun Phrase Accessibility Revisited.” *Language* 55 (3). 649-664.
- Croft, William 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dixon, Robert M.W. 1982. *Where Have All the Adjectives Gone? and Other Essays on Semantics and Syntax*. Berlin: Mouton.
- Dixon, Robert M.W. and Alexandra Aikhenvald (eds) 2004. *Adjective Classes: A Cross-linguistic Typological Study*. Oxford: Oxford University Press.
- クロヤン・ルイザ, 堀江薫 2019a. 「アルメニア語の不定形動詞による名詞修飾表現の成立に関わる語用論的要因 — 日本語との対照を通して—」『日本認知言語学会論文集』第 19 巻. 210-222.
- クロヤン・ルイザ, 堀江薫 2019b. 「アルメニア語の非定形名詞修飾表現の時制解釈 — 日本語

との対照を通して―』 *KLS SELECTED PAPERS* 1. 49-60.

クロヤン・ルイザ, 堀江薫 2020. 「アルメニア語の非定形名詞修飾表現の特徴 ―日本語・英語との対照を通して―」 プラシャント・パルデシ, 堀江薫(編) 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』. 535-553. 東京: ひつじ書房.

クロヤン・ルイザ (Kloyan, Luiza) 2022. 『アルメニア語の非定形名詞修飾表現―日本語および英語との対 照を通して―』 名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士論文

Petrosyan, Hrant Z. 1987. *Hayerenagitakan bararan* (Scientific dictionary of Armenian language). Erewan: Hayastan.

プラシャント・パルデシ, 堀江薫(編) 2020. 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』 東京: ひつじ書房.

プラシャント・パルデシ, 柴谷方良 2020. 「マラーティー語の名詞修飾表現―体言化理論の観点から―」 プラシャント・パルデシ, 堀江薫(編) 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』 413-445. 東京: ひつじ書房.

Shibatani, Masayoshi 2009. “Elements of Complex Structures, Where Recursion Isn’t: The Case of Relativization.” In Talmy Givón and Masayoshi Shibatani (eds.), *Syntactic complexity: Diachrony, acquisition, neuro-cognition, evolution*. 163-198. Amsterdam: John Benjamins.

Shibatani, Masayoshi 2017. “Nominalization.” In Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda (eds.), *Handbook of Japanese Syntax*. 271-332. Berlin: Mouton de Gruyter.

Shibatani, Masayoshi 2018. “Nominalization in Crosslinguistic Perspective.” In Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.), *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*. 345-410. Berlin: Walter de Gruyter

Shibatani, Masayoshi 2019. “What Is Nominalization? Towards the Theoretical Foundations of Nominalization.” In Roberto Zariquiey and David Fleck (eds.), *Nominalization in languages of the Americas*. Amsterdam: John Benjamins.

鄭聖汝, 柴谷方良 2021. 『体言化理論と言語分析』 大阪: 大阪大学出版会.

Non-finite Relative Clauses in Armenian: Views from the Perspective of a Nominalization Theory

Luiza KLOYAN

luizakloyan@yahoo.co.jp

Keywords: Armenian, nominalization theory, adnominal modifier, resultative participle, future participle, subject participle, infinitives, nominal-based nominalization, verbal-based nominalization

Abstract

This paper reexamines the characteristics of ‘non-finite relative clauses’ in Armenian from a new nominalization theory perspective. It is shown that so-called participial relative clauses and infinitival relative clauses apply to ‘argument nominalizations’ and ‘event nominalizations’, respectively.

This paper argues that genitive/possessive constructions are nominalizations formed from a nominal base. Participial and infinitival constructions, however, are verbal-based nominalizations developed based on the model of nominal-based nominalizations.

The proposed analysis sheds new light on the ‘nominalization’ argued in traditional Armenian grammars, according to which definite articles, possessive suffixes, and personal suffixes serve as nominalizers. The new nominalization theory, however, allows us to think that definite articles do not nominalize but serve to indicate that the subset in question is nominal, and is identifiable or familiar to the recipient. Possessive and personal suffixes are used to denote event participants.

On the other hand, genitive case endings serve as nominalizers for nominal-based constructions as shown in Shibatani’s (2009, 2019) cross-linguistic observation. We can detect some parallelism between infinitival and nominal-based nominalized constructions in this regard

(クロヤン・ルイザ)